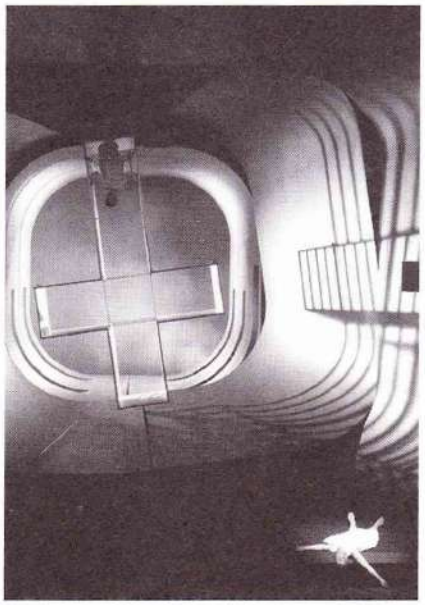
Opera バイエルン州立歌劇場初のプッチーニ「三部作」

プッチーニ「三部作」(《外套》、《修道女アンジェリカ》、《ジャンニ・スキッキ》)の全作上演は、バイエルン州立歌劇場では初となる。この特異な作品を、音楽監督のキリル・ペトレンコが選んだからには、しかるべき上演意義を見出したのだろう、と期待して劇場に向かった。ロッテ・デ・ベールを演出に迎え、それがプッチーニの意図通りかは別にしても、「三部作」としての調和とコントラストが明確に表現された芸術作品となっていた。



宇宙船内部のような舞台装置も印象的だった。《修道女アンジェリカ》から。右下、タイトルロールを歌ったヤオ
©W.Hösel

宇宙船内部のような舞台装置は時空を超えるタイム・トンネルのようで、内側が一回転できる。子供の出棺から始まる《外套》は、暗い殺人劇だけでない人間の哀しみをも表わした。ルイージ役のヨンフン・リーは、イタリア語に聞こえないポジションで発音しているものの、超人的な声を聴かせた。彼の死体が前述の回転式舞台装置で効果的に吊り下げられた直後、葬列の中から《修道女アンジェリカ》が始まる。

斬髪シーンからアンジェリカの心は固く閉ざされ、奏でられる音楽からも一切の甘さが排除されている。アリアでもメロディ・ラインに溺れることが許されず、禁欲を強いられる劇場全体が、まさに修道院だ。これは、この第2作目をセンチメンタルに仕上げたはずのプッチーニの意図に反するのだが、狂気の様相で毒を飲み、リアルに死んでいくアンジェリカは、甘いプッチーニ節を聴かせるよりも、より多くの観客の目に涙を滲ませた。ここまで迫真の演技ができる題名役のエルモネラ・ヤオでなければ、実現は困難だったであろう。

休憩でやっと悲劇のダメージから立ち直ると、楽しくも皮肉な《ジャンニ・スキッキ》で大団円となった(12月17日所見)。

(中 東生)